

ずいそう

## MOT に思う

室 英 治



私が長年勤務していた竹中工務店技術研究所の宮崎さんから去年の暮れ電話があり、(社)日本建設機械化協会の月刊誌「建設の施工企画」に、MOT（技術経営）のことに何か書いて欲しいという依頼がありました。私は会社定年後4年ほど芝浦工大にお世話になり、2年ほど同大学の工学マネジメント研究科（MOTプログラムを展開）で社会人の方々に教鞭を取る機会がありましたので、その経験を踏まえて、未熟で申しわけありませんがいくつかMOTについて書かせてもらおうと思います。MOT（Management of Technology）とは産学連携による新しい人材育成のために設けられたプログラムのことで、芝浦工大に日本で最初に開設され、現在では国公立校数十校の大学に開設されており、一般には専門職大学院といわれています。2年間で所定の単位を取れば技術経営修士が取得出来ることになっています。MOTの背景としては、これから、経済的にも技術的にも世界の中で先進的な立場を維持する為には、今まで効果的であった、生産性の向上、コスト低減活動のほかに、従来型のマーケットリサーチだけでなく、創造的な新市場の開拓、製品に創造的な付加価値の付与が必要で、それ無しでは企業も国も生き残れないという危機感があるためと考えられます。そのための手段として技術経営（MOT）という言葉が生まれ、経済産業省のパンフレットでは、「技術に立脚する事業を行う企業等の組織が、持続的発展のために、技術が持つ可能性を見極めて事業に結びつけ、経済的価値を創出していくマネジメント」と解説しています。そのためには経営戦略・管理、プロジェクト管理、知財管理、技術開発、商品企画、コミュニケーション能力、会計・財務等の広範囲のスキルが必要とされています。簡単に言うと、今までは先進国、先進企業の各種技術の真似をして、それを改善していけばよかったが、これからは真似でなく、今までの延長上の発想でなく、経済、工学等、研究面、実務面あらゆる知識を総動員して、融合して、創造的な、今までの延長上にないものを創出することが求められ、そのための人材の育成が必要ということです。したがって、専門職大学院はマネジメント系、工学系の専門性を持つ研究及び実務経験の豊かな教員

が配置されています。また、学生は主に、多業種の企業、団体から技術系、事務系を問わず中堅社員から経営幹部まで上記MOTに対する意欲のある幅広い年齢層の人で構成されています。芝浦の場合、「技術・産業論」、「経営・管理」、「財務・会計」、「環境・エネルギー」、「システム・最先端技術」の5領域でカリキュラムが構成され、28名の学生定員になっています。教員も大学教員、銀行、電機メーカー、コンサルタント、そして私のような建設業出身と多岐にわたっています。学生も上記のようなバラエティに富んだ構成になっており、知識、能力向上にきわめて意欲的な人が集まっています。教育は各種技術を経営戦略に如何に融合させていくかということに主眼が置かれ、その一環として学生グループによるケーススタディ（プロジェクト演習）というものがあり、教員から提示された課題を時間をかけてスタディしそれを発表・討議する仕組みになっています。また、2年次に修士論文に相当する「特定課題研究」というものがあり、ほとんどの課題が技術と経営にまたがるものになっており、MOTの狙いが生かされているようです。授業も教員からのワンウェイでなく、討議も多く、専門性の面では社会人として経験の豊かな学生に対して「釈迦に説法」的な面も見られることも偶にあり、学生と教員の真剣勝負となり、お互いに磨きあう場も見られます。本当のところ、教員も教える為常に自己研鑽に気を抜くことができません。実のところ私も大変でした。素晴らしい学生が生まれつつあると思います。社会人でそれぞれの組織で活躍中の人が、勤務後の夜、そして、貴重な休息・家族サービスの機会である土曜日を大学に来て勉学に励む姿には頭の下がる思いがします。そして、ごくわずかな企業派遣以外の学生は安くない授業料は自己負担です。是非、日本の為、各組織の為に技術経営のリーダーとして活躍してもらいたいです。残念ながらMOTの企業社会における認識度合いは今のところ全般的に高いとは言えません。今後は、派遣先の組織の更なる技術経営の重要性に対する認識と派遣学生の活用を期待したいものです。